



近 藤 次 郎 著

シ ス テ ム 分 析

丸善 A5判 271頁 1983年発行 3500円

本書はシステム分析についての百科辞典的要素に加えて現実的な例題が迫力を増している。プロジェクト・リーダーとしての立場のかたにぜひとも読んでほしい。プロジェクトの展開、組織運用の立場上で迷った際にきつと助力となると思う。

システムという言葉がすっかり定着しているものの、参考書となると純工学技術的な本を除いて皆無に等しい。ロケット等の高度の工業製品だけが対象ではなく、実はもっと人間臭さがまじった空港開設とか環境整備といった社会システム分析こそもっと効率よく解決されなければならないのに、この方面の理論解析書がなかったのである。

第1章 システム分析の定義

「徳は孤ならず、必ず隣りあり」という書き起しからはじまり、学際研究の紹介や学際科学の位置づけ等の序論である。

第2章 システム分析の方法

手順、手法、数学モデルの概要、報告書の説明。

第3章 業務分析

組織、会議、デルファイ法といった側面を述べ、特に会議の能率化を望む人々には一読の価値がある。

第4章 構造分析

システムをサブシステムに分け、図解による相互関係を上手に説明している。

第5章 機能分析

サブシステム相互間の因果分析の説明で少々数式が入ってくる。

第6章 影響と関係の分析

線形システム、逆システム、入出力分析、確率システムといった、すべて統計数式の説明で、数学アレルギーの人には面白い章ではない。

第7章 システムのダイナミックス

動的特性の説明でますますむずかしくなるが、例題の航空運航計画モデルは実務家に参考になろう。

第8章 予測

私の一番好きな章で、ことに第8.4節シナリオは、その例題（コンピュータと教育改革、ハムレットのシナリ

オ等）とともに、この著の粋でスマートな一面をのぞかせてくれる。

第9章 価値分析

評価、費用分析、アセスメント、決定の説明。

第10章 システム分析の展開と発展

エコシステム等諸システムの説明。

このあと、参考書紹介（約25著）と人名索引（アリストテレス他50名）、索引（IIASA 他約550語で非常に広範囲の単語が羅列されている）と続くが、読後感には宝石箱をひっくりかえしたようであった。

例題が豊富でその1つ1つが宝石のように何か光をもっている。著者は東大時代にはYS機開発にも参画され、現在は公害研究所にて常に第一級の難問にチャレンジされてこれ、その経験の中から複雑なシステム、ことに社会システムに対してアナリストがいかにアプローチしてゆくべきか、無駄なエネルギーを費やさず少しでも効率的に乗り切る方法がないか研究を重ねてこれたと思う。

したがって本書は学生よりも実務家、なかでもプロジェクト・リーダーの方々におすすしたい。いざという時に必ず役にたつからである。それから著者には、当該でも、

カルマン・フィルター理論（1977年11月号）

創造の価値と方法（1980年2～3月号）

PDPCのすすめ（1982年10月号）

民間輸送機開発のOR（1983年1月号）

会員近況（1983年7月号）

等で読者誰もが親しく接してこれたはずである。

実務のプロジェクト運営で現実的に採用し得る理論的バックボーンとは何か？ 本書はそのような難問をいだけ人々に何かすばらしい標を灯してくれる書である。

（鈴木一行 ソフトネット）